

# —「我が祖国」をめぐって—

■油谷中学校2年 松永 尚樹



僕は「我が祖国」を聴くなかで、三つの楽しみをみつけた。一つは、純粹に音楽を聴く楽しみ。二つ目は、何枚かの絵画を見る様な楽しみ。三つ目は、壮大な物語を読む様な楽しみ。聴くたびに、違った楽器の音色や、音と音の重なり合いの新しい発見をした。聴くたびに、初めに思い描いた絵に、新たな色や情景を付け足した。聴くたびに、想像の物語は、言

音楽鑑賞教育振興会が募集した「第二十八回音楽鑑賞教育振興論文・作文」の中学生の部で、油谷中学校二年、松永尚樹君の作品が最優秀賞・文部大臣奨励賞に輝きました。表彰式は一月二十七日(土)に東京で行われました。以下、松永君の作品をご紹介します。みなさんもこの曲(「我が祖国」スメタナ)を聴きながら、読んでみてはいかがでしょう。

.....

葉を増やしていった。…あれは、中一の二期だった。音楽の授業で聴いた「モルダウ(ヴルタヴァ)」は、僕がそれまでに聴いたどの曲よりも僕の心を捉えた。「もう一度聴きたい」―特にどこか、と聞かれても「何となく」としか答えようがなかったのだが、その後僕は、何回もくり返し「モルダウ」を聴いた。そして、そのうちに僕は、何回聴いても飽きない秘密のようなものを見つけた。それは、楽器の生かし方などの音楽的なことの素晴らしさだけではなく、曲を聴いて想像(創造ともいえる)できるからなのだ。

―「モルダウ」―

源流―フルートの上行音型とクラリネットの下行音型は、秘やかに物語の始まりを告げる。僕がこの部分で好きなのは、バイオリンのピチカートだ。まるで、朝日にきらめく水のしずくのように聴こえる。そして、このピチカートの輝きで、源流は希望の源となる。やがて音が重なりを増し、楽器の数も増えてきて、モルダウの主題となる。この部分のバイオリンのピチカートは、すごい。うねりのある音なのだ。そしてそれは、川巾を広げて流れるモルダウ川の波のうねりを連想させる。コントラバスの低い音は大地だ。やがて

大地を舞台に森の狩猟が始まる。しかし、チェコフィルの演奏を聴いていると、金管楽器はあたたかみのある音でファンファーレを吹いており、僕には、狩猟というより、ボヘミアの大地の豊かな恵み(水と森と動物たち)を誇らしげに奏でているように聴こえる。続く村人の婚礼の部分でも、コントラバスは生き生きと大地の歌を歌う。「我が祖国」の第四曲「ボヘミアの森と草原より」を聴いた時思ったのだが、きっとボヘミアは、作物のよく実る豊かな土地なのだろうと思わせるようなそんな大地の歌だ。

音楽は情景ばかりでなく、時間の経過も表現できることを僕に教えてくれたのが、「月光に輝く水面と水の精の踊り」の部分だ。にぎやかな婚礼の場面から遠去かり、日は暮れ、PPの低音楽器と音を抑えた木管楽器が夜の訪れを知らせてくれる。きらきらとおだやかに光る金銀の水面。耳を澄ませば、風に静かに揺れる木の葉のようなハーブの音。やがて金管楽器の柔らかなスタカートが聴こえ、夜から朝へ。こここのスタカートのリズムは絶妙だと思ふ。これによって、時の自然な流れを感じさせられるからだ。再びモルダウは朝日の中を、初めより少し力強く流れていく。スメタナは、こ

ピチカート バイオリンなどの弦を指ではじく奏法  
PPP ピアニッシモ(極々弱くの意)  
スタカート 一音ずつ短く切って奏すること